伝えること伝わること

私は看護過程基礎実習で患者Ａ氏を受け持った。Ａ氏を受け持った期間はＡ氏の緊急入院翌日から４日間。Ａ氏は高齢で、加齢による認知機能低下や重度の難聴があり、鼻から挿管されたチューブを抜去する恐れもあることから、身体拘束が行われていた。また、何をするにも介助が必要な状態であり、褥瘡ができないよう、定期的に体位交換する必要があった。しかし、Ａ氏は体に触れる援助を頑なに嫌がり、激しく暴れていた。私ははじめ、どこか痛いのかと考えていたがそれは違っていた。私は難聴であるＡ氏とコミュニケーションを取るため、耳元で低音を意識した大きな声で声掛けを行ったが、Ａ氏は聞き取れていない様子であった。私自身もＡ氏の話す言葉を聞き取ることができず、お互いに困ってしまった。すると、Ａ氏は私に「紙に書いて」とジェスチャーで訴えてくれた。私はＡ氏が両手にミトンを装着していたことから、手浴の援助をしたいと考え、メモ帳に「Ａさんの手を洗ってもいいですか」と書いて見せると、Ａ氏は笑顔で頷き、一切暴れることなく落ち着いて手浴を行うことができた。Ａ氏は体に触れられることが嫌だったのではなかった。看護師の援助の提案を聞き取ることが出来なかったことから、何をされるのか理解できないまま、急に体を触られることが怖かったのだ。そして、手浴を行っていく中で、はじめはぎゅっと握りしめられていた手から、少しずつ力が抜けていく様子が感じられ、Ａ氏が少し心を開いてくれたのだと嬉しく思った。私はＡ氏のおかげで「伝えること」と「伝わること」は全く違うのだと気付くことができた。

私は今まで「伝えること」を意識してコミュニケーションを取ってきたように思う。しかし、今回のＡ氏との関わりを通して、「伝えること」が大切ではなく、相手に伝えたいことが「伝わること」、そして相手がそれを理解できていることが大切だと気付くことができた。もし私がＡ氏と同じ状況であったなら、私も何をされるのか分からない恐怖で体に力が入り、さらに急に体に触れられたなら、驚いて泣くこともあったかもしれないと容易に想像できた。私たちは、働く上で看護師として患者に触れ、援助を行うことが当たり前のように感じてしまうかもしれない。しかし、患者さんはどうだろうか。他人に体を触れられることは非日常的なものであり、ましてや訳も分からないままであれば、なお恐怖を抱くのが正常な反応ではないか。

私はＡ氏と出会えたことで、患者さんとのコミュニケーションをとる際には、「伝わること」が大切であり、そのためには、患者の表情や反応に気付く観察力や広い視野を身につける必要があると学んだ。どの患者さんも急な病気や事故での入院で多くの不安を抱えているだろう。私はＡ氏の見せた笑顔を忘れず、安心感を与えることができる看護師を目指す。